第四類本としての新出資料、毛利元就『御詠草』

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学図書館 公開日: 2022-05-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中村, 成里 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/22439

第四類本としての新出資料、毛利元就『御詠草』

中村　成里

一、はじめに

明治大学中央図書館には毛利家旧蔵本という萩藩毛利家の蔵書群が収蔵されている。執筆者は二〇一九年より毛利家旧蔵本の調査を継続的に行っている。今回は『御詠草』（資料番号：911.15/66/H、書名は明治大学図書館OPACによる）を紹介したい。なお、当該本を以下、明大本と略称する。

明大本『御詠草』は毛利元就（一四九七～一五七一）の和歌と連歌を収載したものであり、書誌は次の通りとなる。

江戸時代初期頃の写か。袋綴一冊。青無地厚紙・梅浮き出し表紙、縦二九・一糎、横二九・一糎、外題「御詠草　全」、題簽左肩、雲英蒔、縦一八・五糎、横三・五糎、内題「御詠草」「連歌」「発句」、墨付三六丁、毎半葉八行、和歌一行書き、連歌二行書き、奥書なし。表紙に「公爵毛利家文庫／個人歌集／114／冊数2」のラベルあり。

明大本の大きな特徴は、①奥書がないこと、②歌数が『連歌大観』所収の宮内庁書陵部蔵『詠草』（写本、五〇一函三〇〇号、以下、書陵部本と略称し、歌番号は『連歌大

観』による）の二〇三首と比較すると少なく、和歌二首（68・70）、連歌二句（80・81）、42歌・78・79句の評、51歌の詞書、112・113句の評が欠落していることである。なお、「紹巴在判」とあることから、当該本は転写本である。

本稿では、明大本を紹介するとともに、毛利元就の詠草連歌と称される諸本においてどのように位置づけられるのかを検討していきたい。

二、毛利元就の詠草連歌と先行研究

さて、本節では毛利元就の詠草と連歌について、先行研究および成立過程を確認していきたい。

まず、毛利元就の詠草連歌の書名は一定していない。主要な伝本の一つに模刻本も存しており、これについては井上宗雄氏による『春霞集』（以下、模刻本と略称する）の紹介が嚆矢となる[1]。このほか『大江元就詠草』『大江元就公独詠集』『大江元就集』『大江元就連歌』『贈従三位元就卿詠草』『陸奥守大江元就朝臣詠草』『毛利元就御詠草』『元就詠草』『元就句集』など、書名が多岐にわたっている。加えて明治大学中央図書館には模刻本『春霞集』（資料番号：911.149/28/D/H）と、『洞春公御詠草』（写本、資料番号：911.149/15/H）が収蔵されていることも併せて附言しておく。

また書陵部本には和歌七三首、和歌の跋に三条西実澄の詠歌二首が記載され、連歌九八句、発句三〇句が収められており、この歌数ならびに句数の本が多数を占める。

次に本文について述べていきたい。先行研究を閲すると、『私家集大成解題』において大島貴子・福田百合子氏は第一類～三類に分類している。以下この分類をもとに考察を加えていく。

第一類　元亀三年奥書本
第二類　天正奥書本
第三類　実澄らの略歴を加筆した本

そして熊本守雄氏は元就の詠草連歌に関する①～④の資料について検討を加えている[2]。

① 紹巴自筆本『毛利元就句集』（毛利博物館所蔵：資料番号二―甲―一二五）
② 道澄自筆・元亀三年六月奥書本『毛利元就詠草連歌』（毛利博物館所蔵：資料番号二―甲―一三）

③　道澄自筆・天正二年三月奥書本『毛利元就詠草連歌』（長府博物館所蔵：資料番号　元就一八―一[3]）

④　元就自筆本『毛利元就詠草』（毛利博物館所蔵：資料番号二―乙―一四三[4]）

熊本氏によると、道澄自筆本は数種類存在しているという。①は連歌の部分のみ、②・③は連歌と和歌を合綴したもの、④は孤本で元就自筆の草稿本という。さらに熊本氏は、一類本の祖本を②、二類本の祖本を③と認定している[5]。

さらに、熊本氏は、『御詠草一事』（山口県文書館蔵毛利家文庫・15文―武・1[6]）の記述から、元就の詠草連歌が「御宝蔵の御物以外に、諸家に蔵されていた元就筆の懐紙・短冊・軸物・掛物等を参酌して編輯されていったものである」ことも明らかにした。

これらの分析をふまえて、久保木秀夫氏は道澄自筆とみられる断簡を検討し、道澄が元就の詠草連歌を最終的に一冊にまとめ、その成立に深くかかわった可能性があると論じた。そして第一類本に属する②の道澄自筆・元亀三年六月奥書本の問題点を指摘した上で、これを補いうる本文を模刻本が有するとも述べており、首肯される[7]。久保木氏の論は、模刻本の頭注に示された「三条亜相手書本」「紹巴本」の本文から、現在は散逸した「三条亜相手書本」すなわち「実澄本」を復原したこと、第一類本および第二類本の限界を明らかにした点においても注目される。

以上が先学によって検討されてきた事項であるが、明大本は未だ調査研究の対象とされてこなかった。

三、第四類本としての明大本

先述した通り、明大本には奥書がない。そして和歌と連歌や評の欠落が見られる。そのため、第二節で掲出した第一～三類のいずれにも当てはまらないのである。和歌、連歌、発句で構成されているところは他本と共通するが、明大本は第四類本として位置づけられるのが妥当であろう。

では、次に欠落している主な箇所を挙げる。本文と歌番号は『連歌大観』の書陵部本（第二類本）による。

《和歌》

42評…暮を契れる花はさくゆへに春の過るうらみふかゝ

るへし

51詞…常栄寺にて詩歌会侍りしに、郭公幽といふことを

68歌…つゝみてもかひやなからん袖の上の涙は月のやとる斗に

70歌…祈つゝ猶年ことにひく注連のなかき齢は神のまに〳〵

《連歌》

78・79評…岩まの水のおつるをみて菅のねの色もひとしさにとくらしと、こまやかなる心哉

80・81句…

ふるさとのかたにしいまやいそくらん
たかねの雲にかへるかりかね

112・113評…ほとは雲井の中を鴈にことつてやらんは、まことにとけかたからんかも

なお、42歌、112・113句評の欠落は模刻本（第一類本）にもみられる。しかし模刻本は和歌の序の二〇行におよぶ脱落を「三条亜相手書本」によって補ったと頭注に記している。明大本に該当箇所が存しているので、模刻本の祖本と同一の類ではないようだ。

また、紹巴の跋文にも僅かながら独自異文がみられる。

明大本　文を撰むを専らせんとする人をいさめん便りに

模刻本　文を捨て武をもつはらとする人をいさめむたよりに

書陵部本　文をすて、武をもつはらとする人をいさめんたよりに

右の異同は文意に関わる。明大本は「文事にのみ関心を持つ人を忠告する契機に」、の意であろうし、書陵部本や模刻本は「文事を捨てて武芸のみ行う人に忠告する契機に」と解せよう。文事にのみ関心のある人、文事を捨てて武芸にのみ関心のある人とでは、内容が全く異なってしまう。

紙幅の都合上、すべての異同は掲出できないが、明大本は他本とは異なる類に属すると目されるのである。

四、おわりに

明大本は、第一類本から第三類本と比較すると、奥書

がなく欠落や異同をも有する一本である。ただし、構成は他本と同じであるので、明大本の祖本の成立は同一の過程を経ているとみられ、おそらく道澄が関わっていよう。では、なぜ奥書が記されなかったのか。

久保木氏の論をふまえて[8]、道澄が元亀三年（一五七二）四月に「実澄本」と「紹巴本」を纏めたと仮定すれば、その際の草稿が明大本の祖本であったとは考えられないだろうか。手控えだからこそ、欠落や独自異文が存在するのではないか。第一類本と共通する欠落部分を考慮すると、道澄が元亀三年奥書本を一冊本にまとめる際の草稿が明大本の祖本ではないかと思量されるのである。

明大本は新出の第四類本と位置づけられ、草稿的な性格と推されることを指摘して、ひとまず擱筆したい。

1　井上宗雄氏『中世歌壇史の研究　室町後期　改訂新版』明治書院、一九八七年。五八四～五八八頁参照。
2　熊本守雄氏「『毛利元就詠草連歌』と里村紹巴のことなど―防府毛利報公会博物館蔵本解題―」『山口女子大國文』第一二号、一九九三年三月参照。
3　熊本守雄氏『翻刻　長府毛利家旧蔵本『贈従三位元就詠草』―天正二年道澄筆本の原型本」『山口女子大國文』第一〇号、一九八八年一二月参照。
4　熊本守雄氏「翻刻　毛利元就自筆本『毛利元就詠草』―防府毛利報公会博物館蔵（二―乙―一四三）本―」『山口女子大國文』第一一号、一九九二年三月参照。
5　注2、3参照。
6　執筆者は未見。『御詠草一事』に関する内容は熊本氏の論考による。注2参照。
7　久保木秀夫氏「『元就卿詠草』考―伝道澄筆の断簡一葉から―」『調査研究報告』第二〇号、国文学研究資料館文献資料部、一九九九年参照。
8　注7参照。

（なかむら・なり／明治大学商学部専任講師）